

## プレスリリース

---

### 1. 〈書く〉＝〈描く〉 河田政樹の〈ノート〉

アートとは何か。このような根源的な命題を制作のテーマとしている美術家があります。河田政樹（1973年生）は、見る側の視線や感性の挿入の場を作品のなかにあらかじめ設け、作品がアートとして成立するか否かを見る側に委ねるかたちで作品を発表しています。様々な技法や素材、メディアを使っていますが、展示会場の片隅にはいつも、簡便な編集による小冊子〈ノート〉と題された自筆テキスト集が置かれていました。それは展示されている作品解説でも鑑賞補助のためでもない、美術家の覚書、まさしく〈ノート〉でした。「書く」ことは「描く」ことと同様の、美術家としての行為、営み、と捉えていると河田は言います。河田政樹の〈作品〉として一貫したフォームである〈ノート〉。これを美術作品として造形すること。これがプロジェクトの始まりでした。

### 2. 〈見る〉＝〈読む〉 美術作品

美術作品を解釈することを「作品を〈読む〉」というように、美術作品を〈見る〉ことは〈読む〉ことにつながっています。美術家自らが自身の制作テーマに則って造形した「かわだ新書」（書名『アートする美術』）は、〈読み物〉であると同時に〈見る〉対象、オブジェでもあります。美術家による〈本〉といえどアーティストブックがありますが、一般に流通している共通した判型、新書判をフォーマットとしたアーティストブック「かわだ新書」は、美術作品と書籍の両方の機能と領域にまたがった存在として、様々な空間へ出掛けていくことが可能となりました。

### 3. 〈触れる〉＝〈関わる〉 かわだ新書のネットワーク

河田は自身を「美術家である」とは言わず、「美術に関わっている」とあえて表現します。「かわだ新書」は、日本各地のギャラリー、ギャラリーを併設したカフェ、図書室、美術館、学校、アートセンター、ミュージアムショップなど約30カ所に、閲覧自由な、実際に手に取って読んでいただく美術作品（但し「非売品」）として配本・設置され、一定期間が過ぎたら回収される、という方法で一般公開を試みます。配置されるのはたった1冊。配置場所や展示の位置付けは各会場に委ねられ、さまざまです。配本期間中は「新刊案内」と「読者カード」を各ポイントに配付する他、特設ホームページを開設し、読者との交流の場を設けます。美術に関わりながら個々に存在する空間で、様々な人々に触れられたのち「かわだ新書」は美術家のもとに戻り、最終展〈Documents〉の新たな作品空間で1つにつながられます。

### 4. 〈考える〉 メディア・プロジェクトとして

現代を考える上でのひとつのキーワード、高度情報化社会にあって、変革を求められる社会に私たちは生きています。例えば〈新書〉。昨今は空前の〈新書〉創刊ブームを迎え、多種多様な〈新書〉があふれています。現在の「知」を広くに届けることを目的とし生み出された〈新書〉という書籍の理念よりも、流通を目的とした「消費材」としての書籍の形態であることがこれほどに多用されるのでしうし、出版産業のサバイバルのひとつの術(すべ)であると考えられるでしょう。河田の言葉によれば、現代においてアートは「どこまでも横滑り可能な状態」にあります。〈アート〉する営みの中で描き出されたかわだ新書『アートする美術』は、美術家の思索の跡。〈アート〉〈美術〉と呼べるもの、呼ばれるものの〈かたち〉とは？美術家であることの意味とは？その答えは、これまで出会うことのなかった読者（＝鑑賞者）に委ねたいと思うのです。「かわだ新書」というメディア・プロジェクトを通して、アートの現在形を広く問いかけてみたいと思います。